NPO 法人 おおさかこども多文化センター　Newsletter

OKoTaC 通信

オコタック

2021 年 8 月 20 日発行

NO. 44

（10 周年記念兼最終号）

P2－3　10周年によせて　～オコタックをささえてくださった方々から～
P4－9　おおさかこども多文化センターのあゆみ
P10－12　オコタックの活動に参加して
P13－15　高校入学おめでとう！　～新１年生に聞く～
P16－17　特別寄稿『カリフォルニア州における言語的にマイノリティーな高校生への支援』
P18－19　Air Mail　メキシコ便り ㊷ 『最後のメキシコ便り』
P20－22　外国にルーツをもつ子どもたちとともに　～オコタック理事より～
P23　OKoTaC 通信とわたしたち　～最初で最後の編集後記～
P24　終刊のご挨拶、そして
これからは Facebook でもお会いしましょう♪

10 周年によせて

～オコタックの活動にさまざまに関わり、支えてきてくださった方々から、メッセージをいただきました～

『外国につながる子どもたちをともに支えよう』

金光敏（特定非営利活動法人コリアNGO センター事務局長）

自らも現場従事者であることから、可能な限り、わかりやすく、日常に活用できる事例やヒントにこだわっている。単なる評論に留まらない、現場と行政、当事者を結ぶ取り組みの一助となれることを意識して取り組んでいる。

おおさかこども多文化センター発足、10 周年をお慶びいたします。外国につながる子どもたちの支えは、学校の内と外を結ぶ作業からスタートしました。教育支援を皮切りに、福祉支援、労働支援、家族支援等子どもたちの自立に欠かせないすべての分野に視野をおき、子どもたちの夢を支え、希望を膨らませ、社会との接合を続けてきたのが、おおさかこども多文化センターでした。

新型コロナウイルスの感染拡大による一時的な鈍化はあるものの、国境を越えて行き来し、複数の国や地域で生活拠点を持ち、多言語を使い、多文化の中で生きる人々が存在感を増す時代となっています。つまりは地域の小中学校で、高校で、専門学校や大学で学ぶ渡日の子どもたち、または渡日の父母のもとで暮らす若者たちの時代となりつつあるのです。

ただ、ただ、それには要件が必要です。その要件とは、教育支援が確立しているかどうかというものです。何もないところからではなく、みんなで愛情をもって育み、称え、伸ばし、共に生きる空間を広げてあげることで、子どもたちの多くが活躍できるのです。おおさかこども多文化センターは率先してその役目を担ってくれています。今後その役割はますます大きくなると思います。おおさかこども多文化センターと私はこれからも二人三脚で歩んでいくつもりです。

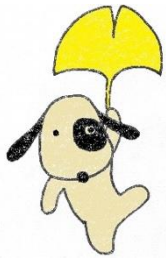
『これまでのオコタック、これからのオコタックへの思い』

山本晃輔（関西国際大学社会学部教員）

専門は教育社会学。大阪大学の大学院生時代から、大阪の特別枠校の調査に携わった。その後、大阪大学の教員として、学生のインターンシップなどでオコタックの活動に関わる。

オコタック活動 10 週年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。オコタックが続けられてきた活動は、大阪における多文化教育を支えるものとして、確かな歩みを刻んでこられました。

とはいえ、その道のりは（失礼ながら）大阪の狭小物件で形作られたものです。事務局を訪問するたび、私は大きな体を縮めながらお話を伺いました。そして様々なことを考えました。主たる活動を推し進めてきた方々は、セカンドキャリアとして取り組まれています。活動の多くは手弁当であるが、なんと年齢を感じさせないパワフルなことか。あぁ、この情熱はどこから湧いてくるのだろう、と。



私は研究者として大阪の外国人教育に関わってきました。大阪の外国人教育の根幹にあるのは「人権教育」であると考えています。この当り前さえ全国的に共有されているとは言い難い状況にあって、大阪には独自の存在感があります。

その存在感を維持・発展させてきたのは、学校教員をはじめとする市民の力です。そんな市民による主体的活動がボランタリーに行われていることを当たり前のように思ってしまっていた私は、オコタックのスタッフの方々に「厳しい状況で頑張ってこられた」と言ってしまいそうですが、それは安易でしょう。

活動にはスタッフの高い志と情熱があったからで、私はそうした活動に学ばなければならないはず。今、あらためて思うことは、オコタックの活動を発展させる、その志と情熱を引き継いでいくことに責任を感じています。

『カルロス君と村上さんに感謝』

石原弘子（多言語絵本の会 RAINBOW）

生まれは大阪船場、祖母はお家さん、母はごりょんさん、弟はこぼんちゃんと呼ばれていました。20 代で河内女になりました。40 代で鶴橋パワーに出会い、50 代後半で目黒婦人になりました。こんな私が、目黒婦人です。「違う」って、面白いです。

日本で育つ外国ルーツの子どもが、母語や母国語を忘れないようにと願って、多言語で読める電子絵本（ChattyBooks）を制作しています。

2014 年ごろ、あるメーリングリストへの私の投稿に応答して、「私も作りたい本がある」と連絡をいただきました。これが、オコタックの村上さん、カルロス君との出会いです。「ええぞ、カルロス」は、大阪市の人権絵本コンクールの受賞作品で、子どもを勇気づける素晴らしい作品です。これに目を付けた村上さんの感性とコーディネート力はすばらしく、たちまち、7 言語のマルチメディアデイジーができました。

マルチメディアデイジーは印刷物を読むのが困難な人の読書を助ける電子書籍システムで、ChattyBooks は、そのデイジーを Web 上で直接読めるようにしたものです。インターネットを通して同じ作品を様々な言語で読めるという利点がありますが、コンテンツの質が問題です。そんな中、多言語電子絵本は、カルロス君のおかげで、認知度が上がりました。タッグを組めたことを感謝しています。ますますの活躍を祈っています。これからも、よろしく、お願いします。

『オコタックで繋がりができた!!』

矢嶋ルツ（日本語指導が必要な子どもの教育センター校教員）

大阪府中学校教員として勤務の後、海外へ。10 年余り滞在した後、帰国した時に運命の出会いが！――オコタックの立ち上げにかかわることになりました。
今は大阪市日本語指導が必要な子どもの教育センター校教員です。

コロナ禍の中で1年が過ぎ、新年度に新しい生徒を迎えました。新しい学校にやっと慣れ始めた4月後半、緊急事態宣言に伴い大阪市では急遽登校時間が制限されました。日本語指導が必要な生徒も学校で過ごす時間が少なくなり、登校時間や学習内容が何度も変更され、家で全く分からないプリントの日本語を書き写す日々が続きました。日本語教室で一生懸命勉強しても、友だちを作る時間も、日本語を話す時間もありません。教師として学校に来られなくなっている子どもの様子も気になります。あらためて学校は子どもたちがお互いに繋がり、共に学ぶ場である事を実感しました。

（写真はオコタック 1 周年記念フォーラムより）

オコタックの活動の柱は、人と人とを繋ぐ事だと思います。10 年前オコタックが結成された日、会に集まった学校関係者、地域の支援者など様々な子どもたちと関わる方々の熱気から、私は新しい広がりと繋がりを感じた事を覚えています。教室の中で行き詰まった時、オコタックを通じて一歩外へ出ることで、救われた事が何度もあります。

この 10 年で多文化の子たちを取り巻く環境は大きく変わり、様々な枠組が作られました。それぞれの場で活躍する当事者も育ってきています。今あらためて大切な事が見えてきた時だからこそ、人との繋がりを作り出すオコタックの重要さを感じています。

おおさかこども多文化センターの

あゆみ（2011～2021）

※1　複数の団体による協働

※2　ヒューライツ大阪との協働

※3　夢応援ネットワークとの協働

★斜体字の項目は写真参照

2011年度

・*オコタック設立1周年フォーラム*
『聞いてください！ 私の「こころ」を ―外国から来たこどもたち―』 第1部「こどもたちの声」、第2部「パネルディスカッション」ファシリテーター：金光敏さん（コリアNGOセンター事務局長）、パネラー：浅倉拓也さん（朝日新聞記者）、鵜飼聖子さん（こどもひろば代表）、白石素子さん（門真なみはや高校教員）、安田乙世（オコタック理事）

・*日本語を母語としない親子の社会見学*（5回シリーズ）

・*『多文化にふれる えほんのひろば』初開催*
（以後～2016年、2018～19年の計7回開催）

・『桂七福の「人権高座』と笑いながら学ぼう「人権ええやんか！」』※2

・オコタック設立総会（2011.2.18）

・事務所を港区に開設

・府教委より『ピアにほんご（大阪府日本語教育学校支援事業）』受託（～2020年度まで）

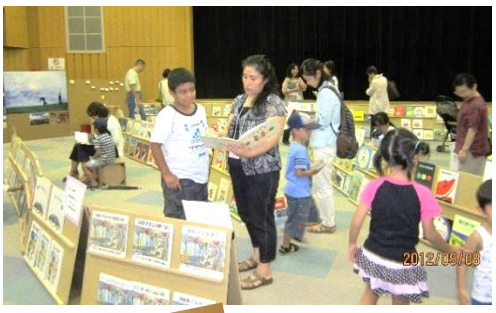
・『高校生のための日本語』（夏期・冬期・春期）

・『外国にルーツをもつ子どもへの日本語指導ボランティア養成講座 2011』（10回シリーズ）

・事務所を本町に移転（2012.1.29）

・『トランスナショナルな子どもたちの教育を考える～外国にルーツを持つ若者からのメッセージ』
（ワン・ワールド・フェスティバル内企画）※1

2012年度



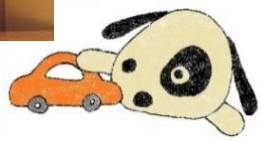
2013年度

・「貧困と教育」セミナー（3回シリーズ）※2

① 『外国籍のこどもの教育～高校進学・卒業という壁』 樋口直人さん（徳島大学総合科学部准教授）

② 『在日外国人相談の現場から～貧困化とこどもの教育』 竹川真理子さん（NPO 法人信愛塾センター長）

③ 『外国につながる子どもたちのキャリア形成を考える～夢や目標に向けて』 坂本久海子さん（NPO 法人愛伝舎 理事長）、金月由紀子さん（豊中市立第四夜間中学教員）



2013
年度

・「いろいろな国のことばで絵本を楽しむ講座
『どのようにして 読むのかな?』」 石原弘子さん（多言語絵本の会 RAINBOW 代表）

・*「いろいろな国のことばで絵本を楽しむワークショップ」*

・学習会『外国にルーツをもつ子どもの学習上のつまずきと支援のあり方～支援教育の観点から』 伊丹昌一さん（梅花女子大学教授）

・会員交流会 『タイと日本のはざまに生きる子どもたち ～5年間の現地調査から見えてきたもの』 矢嶋ルツさん（大阪市立豊崎中学校教員、帰国した子どもの教育センター校）

・大阪市西区 髙野区長、NPO事務所を訪問

・学習会『外国にルーツをもつ子どもの支援のあり方～多角的な子ども理解と多様性への対応』 近田由紀子さん（大阪大学大学院 小児発達学研究科）

・*「大阪商工信金 社会福祉賞」受賞*

・西区子育てガイド・多言語版『みんなでたのしくすくすく にしく』作成

2014
年度

・セミナー『グローバル人材と外国ルーツの子どもたち』 浅倉拓也さん（朝日新聞記者） ※2

・学習会『できました!渡日生用教材（理科）』
井上泰雄さん（元大阪市立中学校教員・帰国した子どもの教育センター校）

・*絵本『ええぞ、カルロス』多言語マルチメディアDAISY・電子絵本化スタート*（～2019年度）

・*ころちゃんクリアファイル作成*

・会員交流会 『制度の狭間にいる子どもたち』
鵜飼聖子さん（こどもひろば代表）

・『外国につながる子どもの「居場所」づくり』
（ワン・ワールド・フェスティバル内企画） ※1

・学習会『デリート教材ってなあに?』 松田多枝子さん、渡邊勇さん（大阪市立西九条小学校教員・帰国した子どもの教育センター校）

・阪急阪神 HD「未来のゆめ・まち基金」大賞受賞

2015
年度

・*学習会『できました!渡日生用教材 part2（理科 中学2年生用）』* 井上泰雄さん（元大阪市立中学校教員・帰国した子どもの教育センター校）

・オコタック総会特別講演 『渡日生徒として、特別枠校教員として思うこと』 高雅さん（府立長吉高校教員）

大阪市交通局から感謝状を受け取って喜ぶ高校生たち＝府庁で

ボランティアで通訳
高校生41人に感謝状

大阪市交通局

大阪市交通局は市営地下鉄の主要駅で外国人観光客向けのボランティア通訳を買って出ている高校生41人に感謝状を贈った。

41人は八尾北、門真なみはや、福井、桃谷の府立4校に通う生徒で、中国やフィリピンなど外国にルーツを持つ。府庁であった授与式には、各校を代表して生徒4人が出席。中国出身で八尾北高2年の付超さん(19)は「外国から訪れた人の不安を解消できたとすればうれしい。人に伝える力が身につき、自分にとってもいい経験になった」と話した。

今年度の夏休みや冬休みを中心に、市営地下鉄の梅田駅などで駅員が外国人観光客を案内をする際、母語を生かしてボランティアで通訳を務めた。

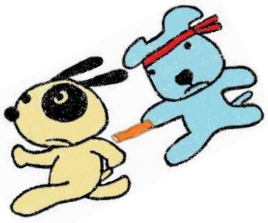
【大久保昂】

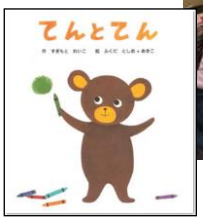
2015年度

- *『府立高校生による地下鉄通訳ボランティア』スタート*　(以後、学校の長期休みを利用して2019年度まで)
- 「大阪府公立高校進学フェア」通訳業務を受託　(～以後、2017年度まで)
- *セミナー『外国人と日本人がともにつくる絵本活動』* 石原弘子さん(多言語絵本の会 RAINBOW 代表)
- 『外国人家族のための高校進学説明・相談会』　(～以後、2018年度まで)
- 学習会『日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ～多様な子どもたちの日本語指導を考える』 ニロとみゑさん(一般社団法人 HOPE プロジェクト代表)
- *地下鉄通訳ボランティアに、大阪市交通局より感謝状授与*
- 学習会『外国にルーツがあり、特別支援が必要な子どもへの日本語指導を考える』 藤川純子さん(四日市市立小学校 特別支援学級教員)

2016年度

- オコタック総会特別講演 『「教科学習につなげるための内容重視の日本語教材」の開発と実践報告』 有本昌代さん(府立門真なみはや高校教員)
- 理事長交代　村上自子→濵名猛志　5月
- 大阪市ボランティア・市民活動情報誌「COMVO」に、リレーコラム『海外から日本へ～大阪の高校に学ぶ若者たち』連載開始(～2019年度まで、計30回)
- 学習会 『やさしい日本語による学習支援 ～やさしい日本語とは? 教科につながる学習支援とは?』 船見和秀さん(伊賀市日本語指導コーディネーター)
- 学習会『突然やってくる外国にルーツをもつ子どもたちをどう迎えるか?』 五十嵐恵美さん(豊橋市教育委員会 外国人児童生徒教育相談員)
- 『府立高校生による訪日観光客への案内通訳ボランティア』、英語も活動言語に
- セミナー『フィリピンの文化と絵本を楽しもう!』 松居友さん、エイプリル・リンさん(NGO ミンダナオ子ども図書館)
- *オコタックの活動、阪急百貨店うめだ本店で紹介*　(～現在まで H2O サンタ チャリティネットワークと連携)
- *多言語マルチメディア DAISY 絵本 『てんとてん』作成*
- 学習会 『学校生活からみえる 外国にルーツのある子どもたちの抱える課題～スクールソーシャルワークの視点から』 佐々木千里さん(社会福祉士)





2017
年度

・オコタック総会特別講演 『外国人児童生徒の複数言語能力の研究 ～家庭言語環境調査から見えること』 友沢昭江さん（桃山学院大学国際教養学部教授）

・*『府内高校生による訪日観光客への案内通訳ボランティア』、私立高校生も参加*

・連続セミナー「最近気になる国・地域からの子どもをめぐって」（3回シリーズ） ※2

① 『ネパール編』 山本愛さん（豊中国際交流協会）

② 『ムスリム編』 山根絵美さん（豊中国際交流協会）、エルモトニ・アシュラフさん（モロッコ出身）

③ 『ベトナム編』 朴洋幸さん（トッカビ 代表理事）、ヴーティ トゥ タオさん（八尾市立高美南小学校言語介助員）

・学習会 『外国にルーツをもつ子どもの“書く力”を育てる学習支援』 清田淳子さん（立命館大学教授）

・学習会『「やさしい日本語」によるコミュニケーション～学校教育の現場から』 岩田一成さん（聖心女子大学 准教授）（大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムと協働）

・*セミナー『“絵本を通して多文化に出会う”場づくり』*

・『ともにいきるシンポ～多民族社会「日本」のこれから』 湯浅誠さん（社会活動家） ※3

2018
年度

・『サタデークラス』がオコタックの事業に （～現在）

・『たぶんかじゅく』がオコタックの事業に （～2020年度）

・オコタック総会特別講演 『子どもの夢応援・新聞記者と考える』 中尾卓司さん（毎日新聞エリア報道センター次長）

・*阪急阪神 ゆめ・まちワークショップ*
『世界の文字でネームストラップを作ろう!』

・学習会 『外国にルーツをもつ子どもの〝日本語力の見取り”から』 古川敦子さん（大阪教育大学グローバルセンター）

・シンポジウム『外国にルーツをもつ × 特別な配慮が必要な子ども』 講師：山本憲子さん（愛知県立大学・知立市立知立西小学校 非常勤講師）、パネラー：田中ルジアさん、浦久仁子さん、水野励さん

・『ともに生きるシンポ ～多民族社会日本のこれから～Part2』 保坂展人さん（東京都世田谷区長） ※3

・セミナー『フィンランドの移民受け入れ ～これから日本が歩む道をさぐる～』 亀谷優子さん（ヒューライツ大阪） ※2

・*地下鉄ボランティアが「CSO アワード2018」グランプリ受賞*

・*たぶんかじゅく アニモが「大阪西淀ライオンズクラブ 元気づくり応援事業」グランプリ受賞*

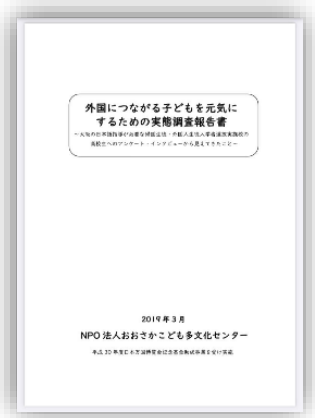
・大阪市港区役所より「多文化共生教育に活用できるデジタルコンテンツのリスト化事業」受託

・*港区内小学校“児童いきいき放課後事業”にて「多文化エンパワメント教室」実施*（8回シリーズ）

・*『外国につながる子どもを元気にするための実態調査』および報告会*

・府教委より、進路支援説明会への通訳派遣を受託（～現在）

2018年度



2019年度

・*オコタック情報交換会 『日米における言語的少数派の生徒をめぐる支援に関する一考察 ～政策制度とその実践から』* 王一瓊さん（大阪大学言語文化研究科 博士課程後期）

・『池田市在日外国人日本語指導支援事業』受託（～現在）

・研修会『外国にルーツをもつ子どもたちの教育課題を考える ～子どもの抱える困難と支援のあり方』 山野上麻衣さん（一橋大学大学院社会学研究科 博士課程後期） ※2

・近畿ろうきん NPO アワード 優秀賞受賞

2019
年度

・阪急阪神 HD 古本市に参加

・*阪急電鉄・阪神電車「SDGsトレイン 未来のゆめ・まち号」中吊り広告でオコタック紹介*

・『ともに生きるシンポpart3 ～佐賀発・子ども&若者応援支援の現場から』 谷口仁史さん（NPOスチューデント・サポート・フェイス）、ラボルテ雅樹さん（フィリピンルーツ） ※3

・大阪大学オムニサイト（OOS）協定の調印

★各講師の所属・肩書は講座実施時のものです。

2020
年度

・研修会『外国にルーツを持つ子どもの教育保障を考える～可児市における不就学ゼロをめざす取り組みを例に』小島祥美さん（東京外国語大学世界言語社会教育センター／多言語多文化センター准教授）※2

・『外国人のための教育相談会』（大阪府国際交流財団 OFIX と協働）

・『ともに生きるシンポ part4 ～外国につながる若者の支援を実践・実績から学ぶ』 堀永乃さん（一般社団法人グローバル人財サポート浜松代表）、田中宝紀さん（NPO 法人青少年自立援助センター）、高橋清樹さん（NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ）※3

・*「日本語指導が必要な児童・生徒のための遠隔支援に関する実証実験」*（大阪大学未来共創センターと協働）

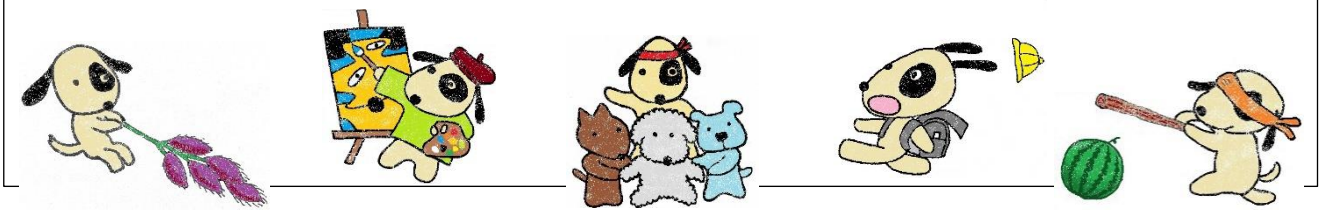
・府教委より、府内夜間中学のチラシ翻訳を受託（～現在）

オコタックのマスコット「ころちゃん」です！

この 10 年、OKoTaC 通信の紙面を、毎号いろんな表情で飾ってきてくれました。また対外的にも、地下鉄ボランティアのビブスや、イベント時の図書館内掲示物などに登場し、多くの人に注目されオコタックの PR につながりました。

「ころちゃん」という名は、初代理事長の村上が昔飼っていた愛犬の名前からもらいました。

かわいらしいイラストは、会員のお一人、柳澤さん（本職は府立高校の国語科教員）のデザインによるものです。季節ごと、また活動が広がるにつれ、「夏らしいイラストを」「学校行事に関係するもので」…など、事務局からの欲張りなリクエストも増えていきましたが、いつも快くお引き受けくださり、100 種類以上のすてきな「ころちゃん」を生み出してくださいました。この場を借りて、あらためてお礼を申し上げます。



オコタックの活動に参加して

『サタデークラスと外国にルーツをもつ子どもたち』　児島良謙（サタデークラス　ボランティア）

30 年間映像制作の仕事をした後、USJ、区役所、コールセンター、病院での介護の仕事をする。現在、認知症のグループホームで勤務。ボランティアは児童虐待関係の活動を経て、子どもホスピスやサタデークラスに参加する。

サタデークラスはその前身である活動が 2003 年に始まり、約 18 年たちました。そしてオコタックの事業になり3年が経過しました。外国にルーツをもつ子どもたちも人数が増加し、教室にくる子どもの年齢も低年齢化しています。

その一方で支援ボランティアは、最初に支援を始めた世代、現在、活動の中心になっている世代、次を担う世代と3世代にわたってきました。

この１年はコロナ禍で、サタデークラスでもZOOMでの勉強をしいられましたが、今後、社会状況は変化していくと考えられます。そして外国にルーツを持つ子どもたちがかなりの数で増えてきている今、今後は日本語指導がますます必要になってくると考えられます。

私は、今、サタデークラスのボランティアも含めた、この社会課題に関わっている教員や支援者達は、活動の着地点をどこに見据えて活動を行っていくのか、次を担う世代に活動をしてきた先輩方の思いをどのように継承していくかを考える時期にきているのではないかと思うのです。サタデークラスが所属するオコタックの活動は、「活動の着地点」と「継承」の２点を考える事により、外国にルーツをもつ子どもたちに心ある支援を計画的に行なうことができ、そしてそのことが子どもたちの未来に寄り添うことに繋がっていくと思います。

『たぶんかじゅくで教えて』　松島啓治（たぶんかじゅく　講師）

大阪府立の布施北、牧野、高津高校で教員生活を送り、今は門真なみはや高校で非常勤教員。教科は数学が主ですが理科（物理、化学）、情報も教えています。趣味はテニス、登山、チェロ、絵画とたくさんですが、何でもやってる割に何もできてない人間です。

たぶんか進学塾（のちに「たぶんかじゅく」と改名）にお世話になったのは 2015 年か 16 年のころだったと思うので、もう 5，6 年たっているようです。その間、主に中国、ネパールの子どもたちを中心にアメリカ人の姉妹など、数えれば 20 数人の生徒と関わってきたことになります。数学がよくできる子から、日本語の壁を乗り越えるのに苦労を重ねている子までいろいろでしたが、子どもたちは乗り越えるきっかけをつかめば、日本語の壁も何かすっと乗り越えて、今までの少し暗い表情が、急に明るくなってきたなと思う瞬間がありました。その時が子どもの成長を感じる時です。親がカレーショップを経営（？）しているネパールから来た子どもがいました。頭が良く、数学の理解力は良かったのですが、ある時こう言ったのを思い出します。「勉強しても何になるねん、数学なんて役に立たん」。日本の子どもたちもこういうことを言うことがよくあるのですが、なんだかその言葉に彼のいらだちを感じました。

大多数の日本の子どもは中学の段階では親の仕事を継ぐなどとは決めていないだろうと思います。しかし、この子は多分、継ぐ事になると思っているのではないかと思うのです。美味しいカレーを作ること、カレーショッ

プを経営することは素晴らしいことだと思いますが、まだまだ分からない彼の将来が、これから開かれていくことを望みます。

子どもたちは親に連れられて日本に来る。それは本人にとっては理不尽な出来事です。今まで育ってきた社会、環境、友だちから強制的に引き離されるのです。大部分の子が日本に来たくて来たのではなく親についてきたという事情が、日本での生活や、勉強に対する意欲を高められないということになると思います。彼、彼女らにはたくさんの壁があり、日本語がしっかりとわかっていないので勉強がわからない、学習言語の習得ができていないので教科書に書いてあることが理解できないのです。それ以外にも、学校生活への不安、環境への不安、将来への不安、アイデンティティーの喪失、親との衝突など困難が山積みです。

2019 年の文科省の調査では在留外国人の学齢相当の児童生徒は約 12 万人で、そのうち約2万人の就学状況が不明だということでした。現在のコロナ状況下では多数の親の就労が不安定になっていると思われるので、もっとたくさんの子どもたちが学校に行けてないのでは、と思ってしまいます。こんな状況では、オコタックの存在は貴重だと思います。

『「多文化にふれる えほんのひろば」に参加して』　　豊田富恵（図書ボランティア）

フルで働いていたけれど 18 年前に退職し、始めたのが地域の幼稚園や保育園・小中学校で小学生、中学生、未就学児への読み聞かせを行う図書館ボランティア。絵や絵画鑑賞も好き。コロナ禍で増えた体重を持て余しています。

今から 10 年近く前にオコタックの梨木さんから、「絵本を通して多文化な子どもたちをつなぐイベントを考えてる」と聞き、私もお手伝いをする事になりました。それまでは、地域での読み聞かせを、絵本や紙芝居・パネル・パペット等を使ってしていましたが、中央図書館でのイベントのお手伝いは初めてで、不安と好奇心で一杯になりました。使用する絵本を集める手伝い、イベント前日にはたくさんの面展台を使って約 750 冊を設営、乳児コーナーにはカラフルマットを並べ、ああやこうやと言いながら進めました。体力も要るけれど知らなかった本と出会い、脱線しつつ楽しみながら進めました。

当日は、多くの人が来場し、子どもたちに声かけしたり希望の絵本を読んであげたりしながら、ボランティア仲間との会話も弾みました。同じ絵本でも国によって、大きさや色味、紙質が違うことにも驚きました。

毎年、回を重ねるごとに日本人・外国人ともにボランティアの輪が広がり、1年に1回再会を喜ぶ「秋の七夕様」なんて冗談を言っていました。外国人スタッフと多言語読み聞かせをしたときは、初対面ながら思いっきりアイコンタクト！それで通じ合え、笑顔で終わりました。

絵本の楽しみは万国共通、参加者の楽しそうな様子に、毎回参加して癒され感謝しています。コロナが終息してイベントが再開したら嬉しいです。

活動に参加してくれた外国にルーツのある若者たちも感想を寄せてくれました――

『「多文化にふれる えほんのひろば」に参加して』　王美雪

私の名前は王美雪です。2015 年に中国の山東省というところから来ました。
日本で高校を卒業し、今は大学に通っています。よろしくお願いします！

私は 2019 年の秋に「多文化にふれる　えほんのひろば」に参加しました。そのイベントでは、同じ外国からの高校生ボランティアたちと一緒に、日本の子どもたちにいろいろな絵本を読んであげました。そこにはいろんな国の絵本があって、私も懐かしい子ども時代の絵本をいっぱい見つけました。日本に来て日本の子どもたちに、母語の絵本を読んであげるとは思ってもいませんでした。

私が一番印象に残ったことは、中国語で子どもたちに絵本を読んであげたとき、真面目に聞いてくれたことです。子どもたちは私の発音を真似してくれて、とても可愛かったです。子どもたちが中国語に興味を持っている姿を見て、私もとても嬉しいです。

このイベントは私に多くの新しい体験をもたらしてくれました。以前は知らなかったさまざまな国の文化を学びました。例えば、各国の動物の鳴き声や、私の名前はロシア語でどうやって書くのかなど、とても面白かったです。私にとってもとても有意義な活動でした。

『地下鉄ボランティアに参加して』　李紫涵

私は今年で中国から日本に来て7年目になります。
大阪府立吹田東高校を卒業し、今は大学2年生です。

私は高校に入ってから、先生に地下鉄通訳ボランティアがあると勧められて参加してみましたが、とても楽しかったので、気づいたら3年間も続けていました。

活動しているときにうれしいと思ったことは、自分の国から旅行に来た人だけでなく、他の外国人にも母国語や英語で案内できたことや、案内が終わるときに笑顔で「ありがとう」と言ってもらえたことです。

毎回ボランティア活動への参加希望調査がはじまるとワクワクして、楽しみにしていました。しかし、高校3年生の冬休みに新型コロナウイルスが広がって、高校最後の地下鉄ボランティアの活動が中止になり、とても残念だと思いながら、高校を卒業しました。

地下鉄の職員さんはみんな優しくて、すべてのことを一から優しく教えてくださいました。

この活動で学んだことは、人を手助けすることはとても楽しくてうれしいことだということです。新型コロナウイルスの感染拡大で何の活動もできていなくて、また、来日したい人も来られないという状況です。早くコロナが収束して、また再び、このような活動に参加したいと思います。

高校入学おめでとう！

～ 新１年生に聞く～

中学を卒業する外国ルーツの子どもたちの多くは、さまざまな困難を抱えながらも入試に挑み、日本の高校に進学します。
この春、新しく高校に合格した新１年生の中から、５人の生徒にインタビューしました。オコタックが運営に関わってきた『たぶんかじゅく　本町校』から１人、『サタデークラス』から４人に、学校生活や今後の抱負について話を聞きました。

何書涵（ハ ショハン）さん
中国ルーツ、八尾北高校
来日は 2019 年４月、『たぶんかじゅく』参加

年齢的には中学3年であるが高校受験のため2年に編入し、その年の秋にたぶんかじゅくに入塾した。中学では最初は日本語教室、その後、理科、社会、国語以外は所属学級で授業を受けたが、全然わからなかったという。来日半年足らずでたぶんかじゅくに来た頃は日本語は少しわかってきた段階だったが、外来語を表現するカタカナは難しかったとのこと。数学については数字は同じだし、日本の文字もなんとなく分かったので理解できたが、英語は頭の中で英語から日本語、日本語から中国語に翻訳していたので、大変だったという。しかし、そんな中、たぶんかじゅくの授業は大きな助けになったそうだ。高校では体育、書道などの科目以外は抽出授業で、やさしい日本語で教えてくれるので、中学の時と違い、わかりやすいとのことだ。

学校は楽しいですかと聞くと、「普通です」と、答える。さらにしんどいことはないですかとの質問には、毎朝大阪市内から1時間かけての登校や、授業ごとの部屋の移動は大変だそうだが、今、困っていることは特になく、授業では難しいところはやさしい日本語で教えてくれるので、できない問題もないという。そして友だちも、同じ日本語指導が必要な生徒の選抜枠で入学した仲間をはじめ、日本人の生徒もできているので、日本語は前より上手になったと、ちょっと自信が芽生えたような顔でいう。

将来は大学に行ったあと、不動産や中国と日本との通商のような仕事をしたいと考えているそうだ。

インタビューを終えて:　インタビューは、何くんが在籍している八尾北高校に放課後、訪れました。ちょうど地域で行われるイベントに出演するため、中国の伝統芸能である獅子舞を、枠で入学した仲間 10 人ほどで楽しそうに練習していました（写真）。担当の先生によると、何くんは1年生ながら2年生の部長と一緒に振り付けなどを担当し、いろいろな面で積極的な高校生活を送っているそうです。
私のインタビューにも、丁寧に応えてくれました。　（Y・H）

木村千雪（キムラ チユキ）さん
中国ルーツ、門真なみはや高校
来日は 2017 年６月、『サタデークラス』参加

高校のクラスはフィリピン、ネパール、ペルー、中国ルーツの生徒と一緒で、簡単な日本語で授業が行われるため 90 パーセントは理解でき、とても楽しいそうだ。日本人の友人もでき、クラブは多文化交流部、フォークソング部とふたつをかけもちしている。週3回ある多文化交流部では休むことなく、加入している各国ルーツの人たちとそれぞれの国の文化について話し合い、お互いの母国の芸能などで交流している。そんな中で、相互理解を深める活動の一環として、木村さんは中国のダンスの練習に励んでいるそうだ。そして文化祭で発表するつもりだという。またフォークソング部ではピアノを担当、週4回の部活すべてには参加できないが、ギター、ベース、ボーカルと合わせる練習はとても楽しいという。

受験勉強はどうでしたか、の問いには、勉強は難しかったが、あまり嫌だとは思わないようにしながら頑張ったそうだ。サタデークラスには来日2年後の 2019 年から参加、日本語、英語、数学を中心に親切に教えてもらい、本人は「サタデークラスにきて、めっちゃよかった、先生がめっちゃ優しかった」そうだ。

高校生活の中でこれからやりたいことは、体育祭での応援団活動と、文化祭でのダンス披露、そして一生懸命勉強して、日本語能力試験のN1と、中国語準1級をとりたいそうだ。

姜海容（ジャン　ハイロン）さん
中国ルーツ、同志社国際高校
来日は 2020 年９月、『サタデークラス』参加

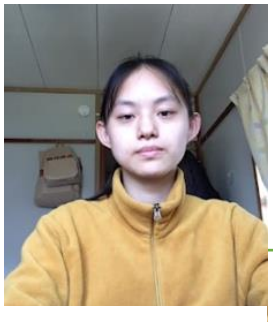
学校はほとんどの生徒が帰国子女で、1学年 270 名くらいの規模。各教科ごとに習熟度別にクラスが分かれているそうだ。例えば英語なら4クラス、数学なら3クラス、化学なら2クラスというように分かれ、自分の時間割にしたがって各クラスに移動するという。数学は得意だが、苦労しているのは、国語と化学、英語。特に英語は英語圏からの帰国者も多く、すでにできている人がたくさんいるので大変だという。

友人についてはカナダから帰国した日本人をはじめとして、多くの友だちができたという。クラブはゴルフ部に入部。ゴルフの経験はまったくなかったが、顧問の先生や先輩たちがやさしく教えてくれ、とても楽しいという。受検勉強が嫌だと思ったことはありますか、との質問には「嫌だと思ったことは特になく、勉強はとてもおもしろい」ときっぱり答える。

サタデークラスには来日した年の 10 月から参加。サタデークラスでの勉強は学校の授業でもとても役にたち、特に日本語をしっかり教えてもらえ、たくさん学べたのはよかったという。

高校生活の中でやってみたいことは、好きな理系の教科をもっと勉強したいとのこと。そして週3回、大学のゴルフ練習場で行われているクラブの活動を 15 人のメンバーと一緒に頑張りたいという。

インタビューを終えて:　ふたつのクラブをかけもちしながら、意欲的に多文化交流をし、ピアノを弾く。そして高い目標をかかげ勉学に励む木村千雪さん。また勉強はおもしろいときっぱりいいながら、理系の学びに焦点をあわせている姜海容くん。2人の目線の先にはなにが見えているのか、とても興味がわいた。（H・K）



【馬暁瞳さん】

姉）馬暁瞳（マ　シュウトン）さん、門真なみはや高校
妹）馬暁涵（マ　シュウカン）さん、千里高校
中国ルーツ
来日はふたりとも 2019 年８月、『サタデークラス』参加

高校のクラスは中国ルーツの子どもばかりだが、授業は簡単な日本語で行われるため、電子辞書を使いながらこなしているという。最初は友人と何を話せばいいかわからず、とまどっていたが、今では日本人の友だちも、中国人の友だちもできたという。クラブは柔道部に所属、中国人はひとりもいなくて、日本人ばかりだが、中国でもやっていたこともあり、楽しく部活動ができているという。

受検勉強では特に英文法を理解するのに困ったそうで、教科書やネットを使って一生懸命に勉強に取り組んだという。また来日2か月後にはサタデークラスに通い始め、最初は日本語がなかなかわからなかったけれど、ボランティアの先生方にとても親切に教えてもらい、受験するころには大分理解できるようになり、サタデークラスに来てとてもよかったという。サタデークラスでは日本語教師の有資格者が専属でつかれたそうだ。

・・・ここまで話したとき、妹の暁涵さんが帰宅。

【馬暁涵さん】

千里高校では中国ルーツの生徒が1年生ではシュウカンさんひとりだそうで、そのため友人は日本人ばかりだが、友人との会話は普通のスピードでも困らないそうだ。クラブはバトミントン部で緊急事態宣言下のため、土曜日と日曜日しか練習できないが、とても楽しいという。

高校受験に際して、勉強が嫌だと思ったことありますか、という質問には力を込めて「もちろんあります。でも嫌だと思っても、やる必要があるのが勉強だから頑張りました」と力強い返事が戻ってきた。シュウカンさんも姉のシュウトンさんと一緒にサタデークラスに通い、先生方にやさしく、わからない問題をどんどん教えてもらい、よく理解できたという。

2人に高校生活でやりたいことを聞くと、姉のシュウトンさんは数学と英語の勉強、そしてクラブを頑張り、日本語能力試験のN3に合格したいという。妹のシュウカンさんはクラブと勉強の両立。そして、日本人の友だちとは国語では大きく差があるので、少しでも友人たちに近づけるように頑張りたい。そして目標を日本語能力試験N1合格、英検1級合格とたてた。それは高い目標を持てばそれだけ自分が頑張れるからだという。

インタビューを終えて:　来日して2年足らずにも関わらず、しっかりとした目標をたて、高校生活を楽しみながらクラブに勉学に励んでいる2人の姉妹。日本語はまだまだたどたどしいが、とても頼もしくみえた。　（H・K）

特別寄稿

『カリフォルニア州における言語的にマイノリティーな高校生への支援』（後編）

大阪大学人間科学研究科附属未来共創センター 特任助教 王一瓊

編集部より

王さんはトランプ政権下に渡米され、言語的にマイノリティーな子どもたちの教育状況について研究されました。カリフォルニア州X市の2つの高校での調査からわかったことと、そこでの取り組みの紹介のうち、前回の 43 号ではニューカマー教育に力を入れている公立高校 A 校を取り上げています。この高校は英語指導が必要な生徒（English Learners、以下 EL 生徒と呼ぶ）の割合が 90%以上に達しているというなかで、評価の高い英語学習支援の取り組みの様子を報告してくださいました。今回は生徒も教員も人種的に多様でかつ大規模校 B 校についての報告です。

なお、編集部の都合で前回の掲載から、かなりの期間をおいての掲載となり、王先生にはご迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

2. 世界の言語プログラム、総合的英語学習者支援プログラム、中国語イマージョンプログラムが共存する公立高校 B 校

B 校は 100 人以上の教職員と 2000 人以上の生徒を擁する大規模校で、X市の中でも中国人の集住地域として知られる Y 区に位置している。B 校も A 校と同じように、93%の生徒がエスニック・マイノリティーである。アジア系の生徒の割合が 61%、ヒスパニック系が 21%と大多数を占め、その他、アフリカ系アメリカ人、白人、アメリカ原住民、パシフィック・アイランダーズが在籍している。カリフォルニア州では、英語以外の第二言語が必修科目であるため、B 校にも世界の言語プログラムが設置され、中国語、日本語、スペイン語とフランス語が教えられている。そこでは、中国や日本にルーツを持つ教員、スペイン語やフランス語を話せる教員が常勤として働いている。また、B 校には中国語イマージョンプログラム（外国語を手段として他教科を学習するするプログラム）があり、中国語による生物や母語話者レベルの中国語授業が行われている。外国にルーツを持つ教員は、ルーツの言語の授業を担当するとは限らない。授業見学させてもらった中国人の教員は、以上の 2 つのプログラムに所属しており、生物と中国語を教えているが、一般科目の保健などを英語で教えている。知り合ったフィリピン人の教員は数学を教えている。そのため、B 校の教員にも非常に多様性がある。職員会議で異なる人種の先生が一堂に会する様子が筆者には

B 校の廊下

非常に印象深かった。

B 校はエスニック・マイノリティーの生徒が多いが、英語指導が必要な生徒（以下 EL 生徒）の割合が A 校より比較的少ない。家庭内で英語以外の言語を話す子どもたちは、幼稚園から ELPAC（English Language Proficiency Assessments for California）というテストを受け、英語能力が測られる（ELPAC の妥当性についてはここで論じない）。ELPAC に合格できなかったら、EL 生徒だと認定される。B 校のニューカマー生徒も、B 校に入学後テストを受けるが、そのテストの結果は、英語を担当する教員だけではなく、生徒と関わる全ての教員が共有している（ニューカマー生徒が EL 生徒だと認定される場合が多い）。教員は職員会議などを通して、EL 生徒をいかに支援するかを協力して決めているのである。また、日本の取り出し授業と同じように、カリフォルニア州では、「Sheltered instruction」という授業が存在する。教科内容の理解徹底と英語能力の向上という2つの目標があるという。

B 校で参与観察を行い、印象深かったのは、生徒間の助け合いである。上級者の生徒（アメリカの高校は単位制であるため、必要な単位数を取ったら、授業に出る必要がない）が、TA（Teaching Assistant）として雇われ、EL 生徒向けの英語の授業や「取り出し授業」に出席し、授業内容を母語に訳したり、難しい箇所を教えたりするなどのアドバイスを行なっている。TA を務めた生徒は、TA の経験を履歴書に書くことができ、大学進学の際の評価の一部として考慮される。筆者は生徒間の WIN-WIN 関係に感心した。

放課後プログラムの告知

言語的少数派の生徒の母語はどうなるだろう。前述したように、カリフォルニア州の高校生は全員英語以外の第二言語を取らなければならない。ニューカマーの生徒は、その制度を活用し、自らの母語をとっている。さらに、B 校では、中国語、スペイン語の AP 授業が設定されている（AP 授業とは上級レベルの科目で、いい点数を取れると、進学先の大学では、大学の単位として認められる。また、AP 授業を取ることが、大学の進学に役立つ）。ニューカマーの生徒だけではなく、アメリカ生まれの言語的少数派の生徒も積極的に母語の AP 授業を取り、一生懸命勉強している。

B 校においては、EL 生徒に対する手厚い支援が行われているが、課題も残されている。EL 生徒は、英語の授業や取り出し授業に参加しなければならないため、他の生徒と隔離されているのではないかと懸念している先生がいる。また、カリキュラムの設定上の問題で、EL 生徒が取ることができる科目は非常に限られているそうだ。

一言でアメリカと言っても、州によって教育政策などが全く異なる。アメリカの生徒と教員の方々と出会い、いい刺激を受け、いい勉強になった。この度、カリフォルニア州の高校での経験談をまとめたが、読者の皆さんの参考になればうれしいと思う。

メキシコ便り㊷「最後のメキシコ便り」

（おおさかこども多文化センター会員　金野広美）

長い間みなさんに読んでいただきましたメキシコ便りもこれが最後、私は今帰国の途につきアトランタでの 16 時間の待ち時間に最後のメキシコ便りを書いています。メキシコに来た時には全くいなかった友人も今ではたくさんでき、一人ひとりとの別れの挨拶はとてもつらいものでした。いつも大学のキャンパスで会話の練習にと時間をとっておしゃべりをしてくれた、インディヘナ・アートのクラスの友人アドリアーナ、トイレでさいふを拾ったことから友だちになり家族ぐるみのつきあいをしたバネッサ、「今度はいつくるの」といつも聞いてくれ、メキシコ料理の作り方を教えてくれたデルフィーナ、「メキシコの歴史と政治」のクラスで知り合ったラウラはメキシコの現状や問題点について、常にわかりやすく説明してくれました。また私のクラスに教育実習に来て親しくなったタニアは毎回進級のためのオーラルテスト（みんなの前で5分間話すもの）の下書きを添削してくれました。全過程を無事に終了できたのも彼女のお陰だと思っています。また、日本語とスペイン語をお互いに教え合い、両国の文化について語り合ったエマ。サルサ教室で知り合い、よく一緒にディスコに行ったロサルヴァとアロンドラ姉妹。私のアパートでトラブルが起こった時、助けてくれたとなりの部屋のマリオ。そして若いミゲルは私にメキシコの負の部分も知って欲しいと、自分が援助活動している、貧しい人々が住む地域を案内してくれました。

メキシコには多くの問題があります。特に教育の欠如、不備による問題は顕著です。平気でゴミを道端に捨てる人、最後まで責任を持って仕事をしない人、駐車場と化している道路でこずかい稼ぎをする警官、保身と蓄財しか考えていない労働組合の幹部、ワイロが横行する政治の世界、などなど、いいだしたらきりがありません。

また、学校の施設が足りないため午前と午後の２交代制で十分な勉学の時間がとれない学校教育。こんな中では人間としての豊かな感性を磨き、人としてどう生きるべきかを学ぶための時間などは当然削られてしまいます。そして、無償の国立大学は、あまりにも狭き門で、私立は高すぎるという大学教育の現状、メキシコではわずかの秀才かお金持ちでない限り大学まではなかなか進学できません。

国の根幹をつくるのは教育だといわれますが、そういう意味ではメキシコはかなりお粗末な状況にあると思います。この話を友人のラウラにすると、彼女は「メキシコは生まれて 200 年の若い国なので、まだまだ発展途上にあり国としての成熟が遅れているのよ」といいます。「え？200 年？メキシコには紀元前からの歴史や文化があるじゃない」というと彼女は「それらは文化遺産としては残っているけれど、スペイン人がメキシコを征服した時、私たちの歴史を証明するものはすべて焼き尽くされ、我々の歴史としてはスペインから独立した後の 200 年しかないのよ」というのです。うーん、なるほど。そういえばミゲルも「この国が変わるにはあと3世代 100 年はかかる。スペインに征服されていた期間と同じ 300 年はかかる」といっていました。

それにつけても 300 年に及んだスペインの征服。この征服がメキシコに及ぼした大きすぎる影響について友人のエマとこんな話になりました。ある日、私が常日頃感じていたメキシコ人についての疑問をエマにぶつけた時のことです。その疑問というのはメキシコ人はとても我慢強いというか、なかなかお上に対して抗議行動をおこさないのです。

いつまでも放って置かれている道路の大きな穴や、出っぱった杭、これらを直すように役所に文句をいう人はいません。４日も５日も断水が続いても、水が出るまでだまって黙々と水運びをします。けた外れに荒っぽい地下鉄

やバスの運転にも何も言わず耐えています。のろのろした役所の仕事ぶりにも長い列をつくってひたすら待ちつづけます。私はエマに「いったいどうしてメキシコ人は我慢するの？なぜ抗議しないの？」と聞きました。するとエマは「抗議をしても無駄、何も変わらないとあきらめているのと、それにも増して権力にたてつくのが怖いという気持ちがあるのよ。そしてこの恐怖心は 300 年に及んだスペイン征服時にメキシコ人にすりこまれたものなのよ」というのです。

うーん、そういえばメキシコ人はよく思い通りにならない時に、ニモド（仕方ないね）といいます。いつもこの言葉を使ってあきらめてしまい、あまりものごとを深く追究しようとはしません。そしてフィエスタで飲んで、しゃべって、踊って忘れてしまいます。しかし、私は今はもうスペインの征服者は居ないし、おまけに現代に生きる人たちが、まだその恐怖を覚えているというのはどうにも納得できません。彼らがあまり抗議行動をしないのは恐怖心の記憶というより、私には別の理由があるような気がするのです。

それはメキシコは 1810 年にスペインから独立しましたが、依然として他国による征服状況は続いているのではないかと思うのです。とりわけ米国が今、メキシコ経済を牛耳るという形で宗主国のようになっているような気がするのです。

大きなスーパーマーケットやホテル、レストランチェーンをはじめとしてたくさんの米国資本がメキシコに入り、利潤は米国に持っていかれます。そしてまた、危険を覚悟の上で多くの人が国境を越え、米国に出稼ぎしています。家政婦をしたり、工事現場で働いたりする彼らがメキシコに送金してくるドルはいまやメキシコ経済の大きな支えになっているのです。米国がくしゃみをするとメキシコは風邪をひく、といわれるほどメキシコの経済は米国に依存しているのが現状です。スペイン人による破壊、略奪、暴力という征服のやり方とは変わりましたが、経済生活における相変わらずの他国による圧迫感と閉塞感があきらめの感情を呼び起こし、それがなかなかプロテストできない原因のひとつになっているのではないかと思うのです。

しかし、このラテンアメリカに共通する図式には少しずつ変化が現れてきています。困難さは伴うでしょうが、いつの日かメキシコがスペイン 300 年の呪縛と米国のくびきから解き放たれ、名実ともに明るい「太陽の国」になってほしいと切に願います。

思えば2年5ヶ月前、メキシコに着いた時、言葉のできない異国で一人でやっていけるのだろうかという不安感と、しかし、来てしまったのだという開き直りが交錯する中での武者ぶるいにも似た感覚ではじまったメキシコ生活でした。

先生の言うことはさっぱりわからず回りは欧米から来た若者ばかり。みんなよくしゃべり、理解できているように見えて何度も落ち込みました。彼らの何倍もやらなくてはついていけないと悲壮な気持ちになりましたが、逆にいうと何倍かやればついていけるのだと思い直し必死で勉強しました。毎日 12 時間はやったでしょうか。 私は今 60 歳、世に言う還暦です。友人たちは記憶力がなくなってきた、集中力が落ちてきたと嘆いていますが、私は自分でもびっくりするほど記憶力が増し、若いころより数倍も集中して勉強できるようになりました。

メキシコに来るまでは能力低下を年のせいにする傾向がありましたが、今では本当に「やればできる」と思えるようになりました。やりたいことに対する深い思いとそれをやれる環境をどう作れるかで、いくら年をとっていても「やればできる」のだと思えるようになりました。もちろん強靭な身体に産んでくれた両親に感謝しつつ、これからはあまり言い訳をしない人生を歩んでいきたいと思っています。

時にはメキシコ大好き、時にはメキシコ大嫌いとさまざまな思いが交錯したメキシコ生活でしたが、メキシコは私に学ぶことの喜びと大きな自信、そしてすばらしい友人たちを与えてくれました。私にとっては人生の中でもっとも充実した2年5ヶ月だったと思います。めまぐるしくいろいろなことがありましたが、今ではメキシコだーーーーーーい好きです。

外国にルーツをもつ子どもたちとともに　～オコタック理事より

NPO 設立以来、各々さまざまなフィールドを持つスタッフたちが、それぞれの想いや経験を持ち寄りながら、ともに活動をつくってきました。この 10 年をふりかえりつつ、これからのオコタックに向けてのメッセージを、本来ならスタッフ全員から寄せるべきですが、紙面の都合上、理事・事務局長に限って掲載します。

『オコタック 10 周年に寄せて』　　理事長　濵名猛志

定年前の5年間を外国につながりのある子どもたちが多く在籍する学校で過ごし、そこで、その子どもたちから見える日本の社会の姿を教えてもらいました。そのことがきっかけでオコタック設立から6年目の 2016 年度から、この活動に加えていただきました。

5年間、オコタックの活動に関わって一番印象的なのは、その活動の基本は「人権教育」で、日本語教育、母語教育、母文化学習等様々な取り組みがありましたが、その基本は子どもたちや子どもたちを取り巻くみんなの自尊感情を育て、それをエンパワメントしていくことでした。

最近では、外国につながりのある子どもたちが将来、日本の社会の構成員になるという認識が少しずつ広がり、そのために取り組むべき課題が山積していることが少しずつ社会に認識され始めました。理念的には前へ進んだように見えますが、現実的には、少なくとも大阪では「公」としての取り組みは遅々として進んではいません。

高校生による地下鉄通訳ボランティア

外国につながりのある子どもたちを取り巻く環境は、流動的で刻々と変化していくでしょうが、子どもたちの自らを好きになる心を育み、力づけていくことを重視するという基本的な考え方に基づき、無理せず、好奇心を持って、少しずつ、面白いと思うことを、志を同じくする皆さんと一緒にやってみる。そんなオコタックでありたいと思います。

『オコタック設立から 10 年を振り返って！』　　副理事長　村上自子

私にとって、この 10 年は、公私共にドラマティックな 10 年でした。2006 年に事業化された大阪府教育委員会委託の「ピアにほんご」事業を存続させるために、「外国にルーツをもつ子どもの包括的教育支援リソースセンター」として、オコタックを立ち上げることを決意して、2011 年2月 18 日に NPO 法人の認証を受けました(※)。その年の2月8日に母が急逝し、3月 11 日には、東日本大震災の被害の甚大さを目のあたりにして、生かされた者としての責務は？と考えた時、「自分ができる事をすること」が個人に対しても社会に対しても私の最大の供養だと思いました。

オコタックの活動として、私は「ピアにほんご」事業の受託を 10 年間続けたほか、新たに池田市教育委員会から日本語教育支援事業の受託をはじめ、様々な活動に関わってきました。その中で、私にとって思い出深いものの一つは「外国にルーツをもつ親子の社会見学」です。

2014 年 7 月 24 日朝日新聞社見学

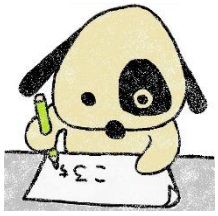
言語・情報・心の壁がある外国人親子にとって、楽しく日本のことを学べる活動は何か？　また、活動を通じて、普段十分な会話がない家族が同じ経験を楽しみ、話し合える機会を提供できる企画は何か？と考え、この企画を立案しました。キリン財団の助成金を得て、日本人家族にも参加を募り、朝日新聞社、阿倍野防災センター、インスタントラーメン発明記念館などを見学しました。母語で親子が楽しそうに話をしている様子は今でも忘れられません。もっと続けたかったのですが、財源が乏しい NPO にとって、継続して助成金を得ることができず、1 年限りの活動に終わってしまったのが、とても残念です。

この 10 年間を振り返って思うことは、継続は力なりです。最初の頃は、おおさかこども多文化センターと名乗ると、別の団体と混同されることが多々ありました。10 年も経つと、外国にルーツをもつ子どもの教育支援の NPO として知られるようになり、オコタックの HP を見てとか、人から紹介されてとかで年間250件ぐらいの教育相談を受けるようになっています。オコタック設立時に思った「私にできる事をする」とは何だったのかを考えると、それは、顔の見える関係を大切にして、人と人、あるいは人と情報をつなげる・つなぐ・つむぐことで、そのことが、様々なものを築く、に繋がっていったのではないかと感じています。

多様な文化・習慣・宗教・価値観を持った子どもたちの教育を考える時、私たちは既存の教育観から考え直さないといけないのではと最近思うことが多くなりました。教育現場で多様性について考えることのできる機会や取り組みの必要性を強く思います。「多文化共生社会の実現」は、私たちの英知が試されています。

私にとって、オコタックの継続は、最大の課題です。でも、最近は「案ずるより産むがやすし」「結果オーライ」と考えるようにしています。

(※)ピアにほんご事業とオコタックの関係に関する記事は、オコタック通信 No26, 27, 28, 29 に掲載されています。



『オコタック活動 10 周年に際して』　　理事　坪内好子

2011 年冬、谷町四丁目のとある喫茶店で、中学・高校・教育センター・地域等々で外国につながる子どもたちに関わり、支援する人たちによる新 NPO 設立準備会がありました。

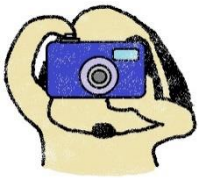
10 年を経た節目の 2021 年に、おおさかこども多文化センターは、設立時以来の主軸事業であった大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご)を運営することを返上し、新たなスタートを切っています。

外国につながる子どもを取り巻く状況は、この数年大きなうねりを持って変化しています。文部科学省も国としての教育の指針や予算を具体化する施策を示しています。

おおさかこども多文化センターは、これまでの多くの取り組みを通じて様々な体験や知見を得ています。これらを基に近い将来、遠い将来を見据えこれからも外国につながる子どもたちが、国や地域などの出身地や文化習慣の違いに左右されることなく教育を受けられ、ヘイトにさらされることのないように、あるべき形を考え提案し実行していくことになるでしょう。

次の 10 年に向けて、さらにこれらのことを発展させていくことが求められています。若い世代を含む多くの世代を迎え入れ、IT を活かしてより効率的に、多様な子どもへの熱い心を持って進みたいものです。

『オコタック 今までの 10 年と、これからに向けて』　　理事　安田乙世



おおさかこども多文化センターの設立準備から関わり、今に至ります。

オコタックでは、主には組織の周知広報やFacebookの管理＆投稿を継続してきましたが、おかげさまでFacebookのフォロワーも 1,300 人を越え、たくさんの方に見ていただけていると思うと、とても嬉しいです。この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

多文化共生というキーワードを持つ団体の「組織づくり」が、どのようにおこなわれ、どのような実践が可能になるのか…日本語教師の私にどんな役割が担えるのかはわかりませんでしたが、個人的には「組織や体制構築」という部分でお役に立てるかもしれないと考えて、理事をお引き受けしました。

しかし、実際は私が「得る」ことのほうが何と多かったことか！と、感謝するばかりです。

オコタックの理事のみなさんやメンバーの方々との対話の中で、そしてオコタックの様々な活動に関わる中で、日本語教師をしていただけでは経験できなかったことに出逢い、また、養えなかったような視点を、この 10 年でたくさん学ばせていただきました。

昨今の日本語教育の現場では、やっと（？）子どもの日本語教育にスポットが当たってきたように感じますが、個々の日本語教師にとっては、依然として、「支援したいと思っていてもなかなかつながりが持てない（＝アウトリーチしにくい）現場」として認識されていることも、もう一方の現実かと思います。

コロナで世界の様相や価値観が一変したと感じますが、それをもひとつの契機として、これからのオコタックという組織をどのように変容させ、未来に繋いでいくのかを、これをお読みいただいているみなさんと共に考えていければいいなと思っています。

『１０年　変わらないこと、変わったこと』　　事務局長　橋本義範

オコタック創立から 10 年も経つかと思うと感慨深いものがあります。

設立当時は府教委からの受託事業「ピアにほんご」があるものの、どのような活動ができるか、正直言って、将来のあり様は想像すらできない中で活動をしていたように思えます。

あれから 10 年。変わらない事も大きく変わったこともあります。その中で変わらないことといえば、相変わらずの狭い事務所、乏しい資金です。これらのことは小さい団体には宿命ともいうべきことなのですが、私はそれほど苦には思っていません。

さて、一方変わったことといえば、活動の広がりと知名度です。

例えば隣に事務所があるヒューライツ大阪さんや「子どもの夢応援ネットワーク」、いくつかの社会貢献活動を行う一般企業など、他の団体との協働による取り組みも増えました。

設立当初から続く、各教育委員会からの相談、依頼に加え、最近は学生さんからの多文化共生に関わる問い合わせや、保護者からの相談が数多くなっていることは、オコタックの認知度が高まっているのではないかと自負するところです。

これまでの屋台骨であった「ピアにほんご」事業から離れた今、NPO 団体としての真の実力が問われる状況にあります。今後はこれまで以上に会員をはじめ、外国につながる子ども支援に関わる人々に、ご協力とご支援をお願いし、新しいオコタック活動を展開したいと考えています。

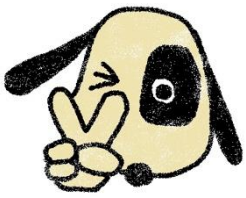
最初で最後の編集後記

今まで『OKoTaC 通信』を陰ながら支えた編集者です。これまでは１度だけ紙面において自己紹介の機会がありましたが、最終号となるにあたりその思いをお伝えします。

（編集部）

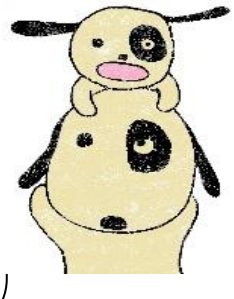
『OKoTaC 通信』は 10 年間で 44 号発行。実に長い間関わってきたものだと、我ながら呆れつつも感心しています。発行締切日前に次々送られてくる原稿と深夜まで格闘しながら、外国ルーツの子どもたちをとりまくさまざまな状況と、彼・彼女らを懸命にサポートする人々の活動、また多様性社会のあるべき理念について多くのことを知ることができました。
私は『通信』では主に校正作業を担当しましたが、正直、これがなかなか大変で、途中で主語が変わってしまっている？？な文章や、字数制限をお伝えしているにもかかわらず、念頭においてもらえない原稿など、苦労も多々ありました。しかし通信終刊は、私にとり眼精疲労からのうれしい解放ではありますが、同時に一抹の寂寥感もぬぐえない残念な事でもあるのです。

（金野広美）



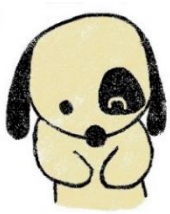
「いつ教えるか？　今でしょ！」「ことばがわからないだけ、勉強がわからないんじゃない！」 私が作った渡日生教材の紹介と、学習言語と教科学習についての私なりの考え方を紹介させていただく機会を２度オコタックに与えていただきました。その後、退職していたこともあり、編集会議のメンバーに入りました。できたのは数字の大文字小文字のチェックぐらいで何も役に立ちませんでしたが、私にとっては学ぶ所が多く、とても新鮮な場でした。最終号となりましたが、おおさかこども多文化センターの益々のご活躍を期待しています。　（井上泰雄）

紙の出版物が好き(笑)で、『OKoTaC　通信』の発刊が決まったとき、やってみたい～と手を挙げました。編集に携わる中で印象に残ったのは、執筆者の方々が皆、それぞれの現場のこと、外国ルーツの子どもたちの姿を、少しでも詳しく正確に伝えようとしてくださる、その熱い想いでした。表現をめぐって、ときにはメールで何往復も議論しながら、私自身とても励まされ、多くのことを学ばせていただきました。また、挨拶代わりに対面で直接手渡すことができる『通信』は、まだまだオコタックのことが知られていない頃、活動を説明するうえで非常に雄弁なツールでもあったと思います。毎号どのページに、どの「ころちゃん」に登場してもらおうか考えるのが、編集作業の中で、私の最大の楽しみでした！　今までありがとうございました。　（梨木亜紀）



多くの記事の中で、府内の 31ヶ所の取り組みを紹介した『地域の子ども支援教室から』はオコタックだからこそできた企画であると自負しています。できればいつか、この改訂版を何らかの形で出したいと思います。
さて、ここまで続けてこられたのは、こちらの依頼に快諾してくださった執筆者の皆さん、ニュースの題材を提供してくださった会員、さらにはボランティアで参加してくださった編集部員のおかげであると思っています。この場を借りて、みなさまにお礼申し上げます。　（橋本義範）

『OKoTaC 通信』終刊のご挨拶



2011 年２月のオコタック結成以来、ともに歩んできたニュースレター『OKoTaC 通信』を、久々の発行となるこの 44 号で終えることになりました。長らくご愛読いただいた皆さま、そして執筆・取材に応じてくださった皆さまに、あらためてお礼を申し上げます。

ご存じのとおり、『通信』は 19 年２月の 43 号以来、２年以上発行が途絶えておりました。編集会議の呼びかけ人である私の体調不良、新型コロナウィルス感染の広がりで、活動そのものを縮小せざるをえなかったことなど、いくつかの要因が重なった結果、このような長いブランクとなってしまいました。

その後、コロナ下での活動にもようやく慣れてきた今年初めに『通信』の再開を検討したのですが、これまでのような印刷された紙面での発行というアナログ方式は時代に沿わないのではと考えるようになりました。そのため事務局内で検討を重ね、理事会の了承も得て、『通信』は今号で終了することを決定しました。

スマホに代表されるデジタルが情報発信の主流となった今、オコタックとしても近年は広報や情報提供ツールとして Facebook に力を入れてきました。現在ではおかげさまで、『通信』では考えられないほどの閲覧者数になっています。今後はホームページとともに、さらに内容を充実させ、より多くの方々にオコタックの活動を知っていただけるよう努めていきたいと考えています。

これまでの 10 年、『通信』を通じて、外国ルーツの子どもたちとともにある、たくさんの方々とつながることができました。そのひとつ一つのご縁を大切に、これからも活動を丁寧に築いていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。　　（事務局長　橋本義範）

これからは、Facebook でもお会いしましょう♪

～楽しく便利に簡単に！Facebook ページ（以下 FB ページ）を閲覧するために～

Q：オコタックの Facebook は、個人アカウントを持っていないと見ることができないの？
A：いいえ。オコタックの FB ページは、Facebook の個人アカウントが無くてもどなたでも見ることができます。

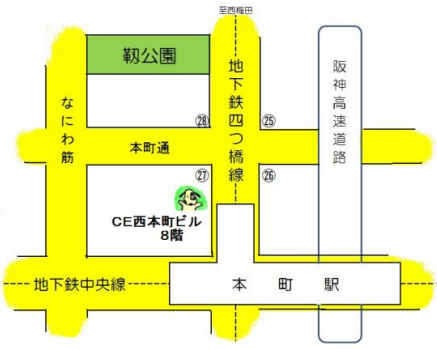
Q：オコタックの FB ページに、どうやってアクセスするの？
A：「おおさかこども多文化センター　Facebook」で検索するとトップに出てきます。「ログイン」などの表示が出ても気にせず（無視して）画面をスクロールしてください。閲覧を継続することができます！

★個人アカウントをお持ちの方は「いいね！」をすることができます。
ページ自体に「いいね！」をするか「フォロー」しておくと、
オコタックの更新情報が自動的に皆さまの
Facebook に届くので便利です。もちろん
各投稿への「いいね！」も大歓迎です！

オコタックの FB ページには、外国ルーツの子ども／多文化／多言語／日本語教育／えほん等をキーワードに、多岐にわたる情報を掲載しています。今後の「つながり」構築のためにも、ぜひ一度のぞいて見てくださいね☆

NPO 法人 おおさかこども多文化センター（OKoTaC）　代表　濵名猛志

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8 階
Tel / Fax　06-6586-9477
E-mail　osakakodomo@gmail.com
URL　http://okotac.org

オコタックの事業紹介やイベント情報、入会案内、各種お問合せは、これまで通り HP から。多言語電子絵本も視聴できます！

郵便振替 【記号・番号】00940－1－272824
（他金融機関からは【店名】〇九九（ｾﾞﾛｷｭｳｷｭｳ）
【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824）
口座名義『NPO法人 おおさかこども多文化センター』
〔ﾌﾘｶﾞﾅ：トクヒ　オオサカコドモタブンカセンター〕